

特別支援学校における「個別最適な学び」と「体育」 －「ゴロ野球」の取組から－

“Individually Optimized Learning” and “Physical Education” in Special Needs Schools : from the “Goro Baseball” Initiative

松 井 由 紀 夫¹⁾
MATSUI Yukio

野 戸 谷 睦²⁾
NOTOYA Atsushi

I. はじめに

中央教育審議会「教育課程部会における審議のまとめ」（令和3年1月）において、『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）』が取りまとめられた。このなかで「多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と，子供たちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の一体的な充実が図られることが求められる」とされた。

今回，肢体不自由教育領域における「ゴロ野球」を取り上げる。学習指導要領では肢体不自由特別支援学校の各教科は，「各教科の目標，各学年の目標及び内容並びに指導計画の作成と内容の取扱い」を小・中学校学習指導要領に準ずることとしている。その上で，各教科の指導は「特別支援学校ごとに必要とされる指導上の配慮事項についての説明も十分に踏まえた上で，適切に指導する必要がある」とされる。このことは「体育」においても

同様であり，指導上の配慮事項に留意しながら計画実施するものである。

本研究では，「ゴロ野球」を紹介し，一般的な「球技」を一人一人の障害に応じ，集団でプレイするために必要なルール構成の方法を明らかにするとともに，「個別最適な学び」を「球技」において実現するための必要な考え方に迫りたい。

II. 個別最適な学びと特別支援学校

中央教育審議会の令和3年答申によると，「個別最適な学び」は，「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理される。「指導の個別化」は「教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや，子供一人一人の特性や学習進度，学習到達度等に応じ，指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うこと」「一定の目標を全ての児童生徒が達成することを目指し，個々の児童生徒に応じて異なる方法等で学習を進めることであり，その中で児童生徒自身が自らの特徴やどのように学習を進

1) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

2) 北海道札幌視覚支援学校

めることが効果的であるかを学んでいくこと」である。一方、「学習の個性化」は「教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する」ことである。

特別支援学校の「体育」においても、児童生徒一人一人の障害の実態に応じた学習活動、学習機会を設定する「学習の個性化」を図りながら、実態に応じて異なる方法で学習を進める「指導の個別化」を計画・実施する「個別最適な学び」の具体化が求められている。

Ⅲ. 体育「球技」の取り扱い

「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 保健体育編」は、球技について「ゴール型、ネット型及びベースボール型などから構成され、個人やチームの能力に応じた作戦を立て、集団対集団、個人対個人で勝敗を競うことに楽しさや喜びを味わうことのできる運動である」と記述する。このうちベースボール型は「身体やバットの操作と走塁での攻撃、ボール操作と定位置での守備などによって攻守を規則的に交代し、一定の回数内で相手チームより多くの得点を競い合うゲームである。ベースボール型の学習においては、ベースボール型の種目に共通する動きを身に付けることが大切である」とある。（【保健体育編】中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 2 各分野の目標及び内容 125）さらに中学校第1学年、第2学年の指導では「攻撃を重視し、易しい投球を打ち返したり、定位置で守ったりする攻防を展開できるようにする。指導に際しては、易しい投球を打ち返したり、定位置で守ったりする攻防を中心とした学習

課題を追究しやすいようにプレイヤーの人数、グラウンドの広さ、用具、プレイ上の制限を工夫したゲームを取り入れ、バット操作やボール操作とボールを持たないときの動きに着目させ、学習に取り組ませることが大切である」と留意点を示している。

Ⅳ. 特別支援学校における留意点

肢体不自由特別支援学校では、小中学校学習指導要領に準じた指導を計画するとともに、指導内容の設定にあたっては「特別支援教育学習指導要領解説各教科等編」の中で留意すべき点が示されている。このうち体育「球技」に関連する部分を取り上げる。「児童の身体の動きの状態や認知の特性、各教科の内容の習得状況等を考慮して、指導内容を適切に設定し、重点を置く事項に時間を多く配当するなど計画的に指導すること」「児童（生徒）の学習時の姿勢や認知の特性等に応じて、指導方法を工夫すること」「児童（生徒）の身体の動きや意思の表出の状態等に応じて、適切な補助具や補助的手段を工夫する」「各教科の指導に当たっては、特に自立活動の時間における指導との密接な関連を保ち、学習効果を一層高めるようにすること」（特別支援教育学習指導要領解説 各教科等編 第3章 視覚障害者、聴覚障害者、肢体不自由者又は病弱者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の各教科 第4 肢体不自由者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校 11-15）が必要になる。

肢体不自由特別支援学校「体育」「球技」を設定するために必要なことを図に示す。

このように特別支援学校の指導内容の設定

には、多くの要素を組み合わせることが必要になる。

V. 「ゴロ野球」の紹介

「ゴロ野球」とは「選手個々の心身機能・身体構造の状況に合わせた個人ルールが一人一人に適用されて行われる野球」(和, 2011)である。かつて北海道手稲区金山にあった北海道立札幌総合療育センター(以下、療育センター)に入院する肢体不自由のある子どものために考案され、「ゴロ野球」という名称は1986年(昭和57年)以前より使われ、野球の指導法の一つとして取り入れられた(渡邊, 2017)。療育センターは、渡り廊下にて北海道手稲養護学校が併設されており、入院する子どもたちが毎週水曜日の夕食後、手稲養護学校体育館に集まりチームによる年間リーグ戦を行っていた。「ゴロ野球」の審判は、療育センターの理学療法士が中心となり、各チームにはコーチとして療育センター職員、

養護学校教員、ボランティアが所属した。当時の療育センターには、長期で入院する子どもと短期間で退院する子どもがおり、入院での楽しさを知った子どもたちを通して「ゴロ野球」が広まり、札幌市内肢体不自由養護学校を主な拠点として8チームが結成され、年2回の「ゴロ野球」大会開催へと発展した。また「ゴロ野球」は、肢体不自由特別支援学校の体育の授業でも取り入れられるようになった。

VI. 「ゴロ野球」のルール

「ゴロ野球」は「どんなに障害が重くても個人のルール設定のもとで誰でも参加することができるのがゴロ野球である」(和, 2011)という基本的な理念のもとルールを決めている。そのため「個人の障害の状態やその時の体調にも合わせ、一人一人のルールが適用されるため、重度の運動障害があったり、知的発達に遅れのある重複障害者でも参加可

表1 「ゴロ野球」ルール(1)

<p>【ゴロ野球ルール】</p> <p>(1) ルール</p> <p>1) 基本のルールは野球ルールと同じとする</p> <p>2) 参加選手の持つ最大の力を発揮するためのルールとする</p> <p>(2) 攻撃</p> <p>1) 打法</p> <p>①カウント</p> <p>a. 3ストライクでアウト、4ボールでフォアボール</p> <p>b. デッドボールは打けない</p> <p>c. 空振りもストライク(ゴルフ打ちでティー等の用具を打った時も適宜適用する)</p> <p>②打法</p> <p>a. 投げ(ピッチャーが投げた球を打つ)</p> <p>b. ゴロ(ピッチャーが転がした球を打つ)</p> <p>c. ゴルフ(ティー等の用具にボールを載せ、固定した球を打つ)</p> <p>d. 「投げ」「ゴロ」「ゴルフ」の組み合わせで打つ</p> <p>e. スペシャル打ち(「手投げ」など選手の身体能力に応じて)</p> <p>2) ストライクゾーン</p> <p>①基本的には肩から膝の高さとする</p> <p>②身体の状況により打者の打てる高さや範囲を審判が決める</p> <p>3) バット</p> <p>①バットの長さ、太さ、大きさは自由とする</p> <p>②足バットなどの足の利用は可とする</p> <p>③バットの使用は各自の得意な方法とする</p> <p>4) バッティングの支援</p> <p>①姿勢の介助はできるが、動くことやバッティングの支援はできない</p> <p>②介助はチームのコーチ並びに監督がする</p> <p>5) ホームラン及び長打</p> <p>①会場の形状により大会毎に定める</p> <p>②ランニングホームランは定めない</p> <p>6) 走塁⑥ 走塁</p> <p>①走塁のためのベースとして移動ベースを設けることができる</p> <p>a. 移動ベースの位置は選手及びそれに代わる者からの申告制とする</p> <p>b. 移動ベースの距離は選手の力を最大限発揮できる位置とする</p> <p>c. 選手が移動困難な場合は、移動ベースに手などでタッチできる位置におくことができる</p> <p>d. 打者の走塁は「③打者の走塁」による</p>	<p>②移動ベースの移動と走塁の距離</p> <p>a. 移動ベースの移動は審判及び各チームのコーチ等が行う</p> <p>b. 主審は一塁と本塁、副審は一塁と三塁のベース移動を確認する</p> <p>c. 一塁への打者走者は、本塁から設定された一塁ベースまたは移動ベースまでの距離を移動するものとする</p> <p>d. フィールド内にいる走者は移動ベースからスタートし、走塁は真のベースにタッチや駆け抜けるものとする</p> <p>e. 三塁走者の本塁突入は打者や守備との交錯の危険があるため、主審はこれを選べるため本塁から離れた走塁用の本塁ベースを設定できる</p> <p>③打者の走塁</p> <p>a. 三塁方向に移動ベースを置くことができる</p> <p>b. 移動困難なものは手や足などでベースにタッチすることで走塁とみなす</p> <p>c. 上記も困難な場合はコーチの申告により、審判の確認のもと、「見る」ことでも走塁とみなすことができる</p> <p>④走塁</p> <p>a. 盗塁はできない</p> <p>b. 打者の打ったボールが直接アウトになったとき(後述の守備参照)、走者は進塁できず一塁に戻される</p> <p>c. 打者が打った打球が走者に当たっても守備妨害とはしないが、走者が故意に触れた場合は守備妨害とみなし走者がアウトとなる</p> <p>(3) 守備</p> <p>1) 守備全般</p> <p>①キャッチャーや野手はボールを手渡しせず、投げや転がすことで受け渡すこと</p> <p>②タッチプレーは基本的にしない。但しキャッチャーのホームでのタッチは除く</p> <p>③内野・外野守備陣の人数は大会規定ルールに従うものとする</p> <p>④移動範囲が広く速くからでもボールに集中でき、ボールを速くに投げられるものは外野が適任である</p> <p>⑤内野の守備位置はピッチャーの横を越えないものとするが、捕球のために前進してゆくのは認められる</p> <p>⑥プレイやボールへの集中が困難なものは前の位置で守備するのが適当である</p> <p>⑦後述の②) - ①・②で定める選手がボールを取り損ねた場合、その後他のボールに当たったらアウトとできる選手が処理しても直接アウトにならない</p> <p>⑧キャッチャーゾーン(本塁下部の角から半径1m)に他の選手は入ることはできない</p> <p>⑨止まっているボールを掴みずして盗んでもアウトとしない</p> <p>⑩ボールをつかんでアウトとなる選手がファンブルしたボールを再度捕球した場合、ボールの弾み方やキャッチまでの状況によって審判はアウトを宣告できる</p>
---	--

表2 「ゴロ野球」ルール(2)

<p>2) 一般的なアウトの方法</p> <p>①手で捕球し、各ベースに送球し走者よりもタイミングが早ければアウトとなる</p> <p>②ボールをつかんでアピールする</p> <p>③車いす(前輪のみ、駆動輪、全体)や身体などのある部分に当てる、踏むなどする</p> <p>④上記に当てはまらない場合は試合前に審判にコーチより申告し了承を得ること(スペシャルルール)</p> <p>3) 内野守備</p> <p>①ピッチャー</p> <p>a. 投球方法はスピード投げ、ゴロ投げ、ソフト投げ(特殊な場合)とする</p> <p>b. 投球位置はキャッチャーにボールが届く距離とする</p> <p>c. ゴロ投げのときはスピード投げの位置より前の位置で投球できる</p> <p>d. 打者がゴルフ打ちのときはゴロ投げの位置で守備することができる</p> <p>e. ゴロ投げでボールがウンドした場合は、ストライクでもボールとみなす。</p> <p>f. 投手のアウトプレーは他の選手同様とする</p> <p>②キャッチャー</p> <p>a. 大人でもよい</p> <p>b. 守備の指示を出すことができる</p> <p>c. キャッチャーゾーンのボール処理はキャッチャーが行う</p> <p>ア 大人の場合、ボールを直接一塁等に投げてアウトにすることはできないが、ボールをピッチャーにトスすることができる。そこからピッチャーが各塁へ投げてアウトをとることができる</p> <p>イ キャッチャーゾーンから身体全部が出てはいけないが、出ない範囲で積極的にボールを取りにいってよい</p> <p>ド. キャッチャーフライを捕球すればアウトとなる</p> <p>③ファースト・セカンド・サード</p> <p>a. ベースに身体の一部をつけたらボールを捕球するとホースアウトをとれる</p> <p>b. 塁手が車いす使用者の場合、その能力に応じアウトは以下のように規定する</p> <p>b-1 内野手からボールをもらう場合</p> <p>ア 落とさないで受ける</p> <p>イ タイヤに当てて受ける</p> <p>ウ 車いすのどこかに当てる</p> <p>エ 身体全体を含めどこかで当てる</p> <p>オ 上記に当てはまらない場合は試合前に審判にコーチより申告し了承を得ること(スペシャルルール)</p> <p>b-2 外野手からボールを受ける場合</p> <p>ア 近距離の場合、トスされたボールを落とさないで受ける</p> <p>イ 遠距離の場合、上記項目に応じた部分でボールを受ける</p> <p>b-3 大人からボールをもらう場合は内野・外野に関わらず上記Ⅱを適用</p>	<p>4) 外野守備</p> <p>①外野の選手は内野を抜けたボール、あるいは内野手がエラーしたボールを捕球し塁へ投げてアウトにできる</p> <p>②外野手は内野手の守備機会を奪ってはならないが、こぼしたボールを前進して処理してもよい</p> <p>③アウトの方法は「(2) 一般的なアウトの方法」による</p> <p>(4) 審判</p> <p>1) いろいろなハンディに対応できるようにジェスチャーを取り入れて審判を行う</p> <p>2) 主審に加え、二塁付近に塁審を置くものとする</p> <p>3) プレーが見えないなどジャッジがあいまいになる場合、審判同士が協議をしてジャッジをするものとする</p> <p>補足</p> <p>1) 大会運営ルール</p> <p>①試合の回数は3回戦とする</p> <p>②3回の表裏が終了した時点で同点の場合は、2アウト満塁での促進ルールを適用する</p> <p>2) 競技ルール</p> <p>①グラウンドルールを定めてもよい</p> <p>②外野を抜けた場合は二塁打とする</p> <p>③ホームランの高さを規定すること</p> <p>④守備は、内野はキャッチャーを置いて8人以内、外野は3人以内とする</p>
--	--

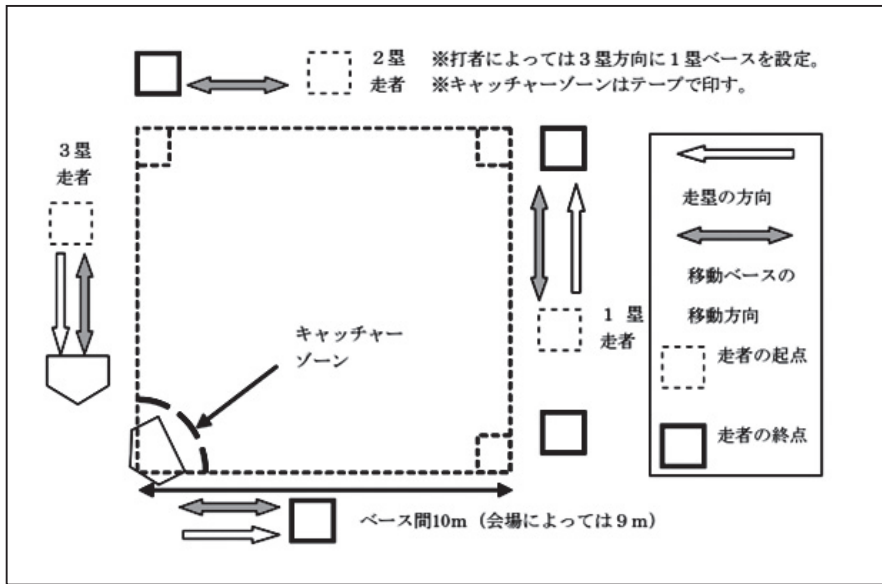


図1 「ゴロ野球 ダイヤモンド」設定 渡邊 (2017) より

能」(同, 2011) な球技である。次に和 (2011) が北海道ゴロ野球連盟「平成18年度改訂版ゴロ野球競技ルール」をもとに加筆した「ゴロ野球ルール」を掲載する。(表1)(表2)

VII. ルールを構築するための考え方

東京パラリンピック開催もありパラスポーツへの理解、興味が急速に高まってきた。しかしパラスポーツ競技のなかで、特別支援学校「体育」に直接取り入れることのできる種

目は少ないのが現状である。また通常の「球技」なども、一人一人の実態幅の大きい特別支援学校では、従来のルールのとおりプレイすることも難しい。特別支援学校に在籍する児童生徒からは「野球」や「サッカー」などのスポーツをやってみたいという声も多く、これまでも様々なスポーツ種目を工夫しながら「体育」に取り入れてきた。しかし在籍の児童生徒のその時々の実態にルールも含めて合わせることから、当該児童生徒が入れ替わった場合と同じ内容で競技を続けることが難しいという課題があった。また他の学校などのチームと試合を行うことにも同様の難しさがある。

「ゴロ野球」は「障害の状況に関わらず、みんなで楽しむ、それぞれの子供たちの能力を最大限に引き出せるルールにすることを基本的な考え」（渡邊，2017）として発案されている。そのためルールに統一性があり、障害の実態に応じて全員が「ゴロ野球」に参加することができるになっている。さらに同一のルールを基に、他校チームとの試合や社会人チームとの試合も可能にしている。では「ゴロ野球」のルール設定にはどのような特色があるのか。「ゴロ野球」ルールを分類しながら検討する。

「ゴロ野球」は、「体育」としては「身体やバットの操作と走塁での攻撃、ボール操作と定位置での守備などによって攻守を定期的に交代し、一定の回数内で相手チームより多くの得点を競い合う」（文科省，2017）ベースボール型の競技に相当する。そこでベースボール型をもとにルールを次の3観点に分類する。

1. ベースボール「型として変更しないルール」
アウトカウント3で攻守が交代する。
打順を決め打席でバッティングする。
4ボール，3ストライクとする。
1塁，2塁，3塁，ホームベースを設定し，走者の進塁により加点する。
守備時は選手が守備位置につき守備をする。
2. ベースボール「型を維持しつつ全体変更するルール」
会場：試合は屋内（体育館）で行う。
試合：3回裏表まで。
使用球：ビニールボール
出場選手数：内野8名以内，外野3名
バッティング：3種類（「投げ」「ゴロ」（ピッチャーが転がすボールを打つ）「ゴルフ（ティーなどの用具にボールを乗せて打つ）」の組み合わせにより行う。
走塁：塁間の走行距離を変更する走塁用「移動ベース」を設定する。衝突防止のための走塁用ホームベースを別に設定する。盗塁は設定しない。
守備：車いすにあてて直接捕球（1アウト）とする。
3. 一人一人の障害の実態から「参加のために個別設定するルール」
バッティング：A. 「投げ」3球 B. 「投げ」2球「ゴロ」1球 C. 「投げ」1球「ゴロ」2球 D. 「ゴロ」3球 E. 「ゴロ」2球「ゴルフ」1球 F. 「ゴロ」1球「ゴルフ」2球 G. 「ゴルフ」3球 障害の実態により7つのバッティングパターンから選手一人一人に個別設定する。実態によってはスペシャルルール

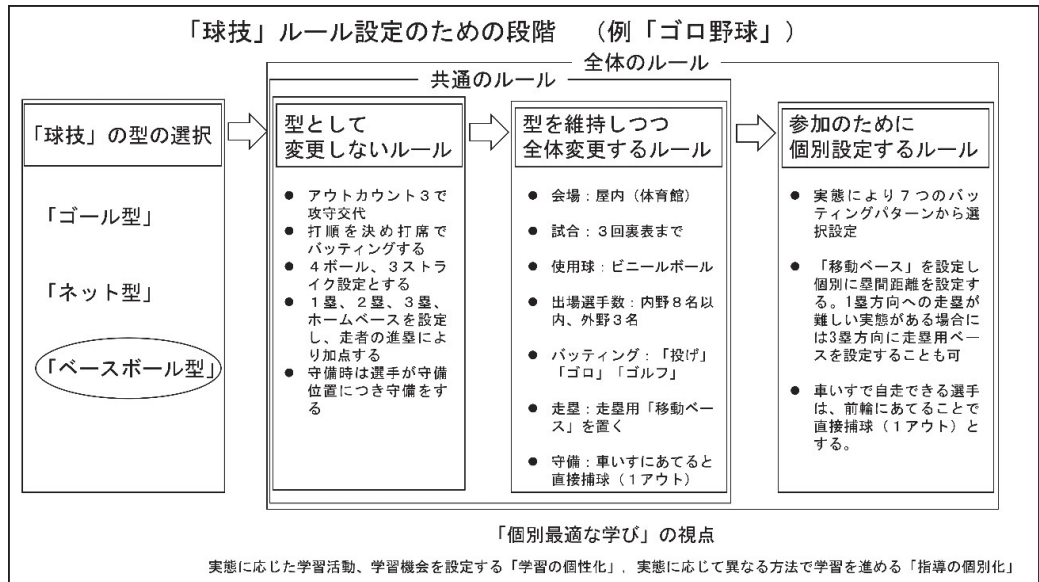


図2 「球技」ルール設定のための段階

も設定する。

走塁：「移動ベース」を設定し個別に塁間距離を設定する。1塁方向への走塁が難しい実態がある場合には3塁方向に走塁用ベースを設定することも可。

守備：車いすで自走できる選手は、前輪にあてることによって直接捕球（1アウト）とする。

この段階を図2に表す。

最初に（1）「型として変更しないルール」を決めることより、「ゴロ野球」が「ベースボール型」であることを全員が意識することができる。次に（2）「型を維持しつつ全体変更するルール」により、競技会場、使用球、出場人数など全体で変更するルールを設定する。競技にあたっては（1）と（2）が基本ルールとなり例外がない。最後に（3）「参加のために個別設定するルール」により、（1）と（2）の基本ルールでプレイするための個

別ルールを決めている。また（3）で設定された個別のルールは選手固有のルールとして試合前に確認があり試合中に変更することはない。

このようなルール設定プロセスにより、競技の「全体ルール」を確定し、このルールのもと参加するために個別設定が必要な場合のルール類型を定め、参加者の実態に応じながら事前に設定をしている。

教育の視点からみると、「参加のために個別設定するルール」を児童生徒に適応するプロセスを経ることは、実態に応じた学習活動、学習機会の設定となり「学習の個性化」が図られることになる。また実態に応じて異なる方法で学習を進める「指導の個別化」についても同時に進めることにつながる。

VIII. おわりに

北海道の肢体不自由特別支援学校に広がり

取り組みが進む「ゴロ野球」のルール構成上の特質に焦点をあててきた。参加者や実施場所が変わっても、集団で「球技」に取り組むことができる「ゴロ野球」は、個の実態から全体ルールを積み上げるのではなく、共通のルールに一人一人が参加できる方法をルールとして確立している。この設定には公平性があり、参加者一人一人が楽しんでプレイできることにつながっている。北海道手稲養護学校の体育館から札幌市内肢体不自由特別支援学校の体育館に広がり、さらには卒業生チームを交えた大会が運営されているのもこうしたルール設定によるものであろう。

今回、「ゴロ野球」を例にルール設定の段階を示したが、この考え方は他の障害種別の「球技」のルール設定を構築する際にも準用できると考える。「球技」を実施するとき、個への配慮や参加の形をどのようにするか行き詰まることがあるが、今回の枠組みをもって考えることは解決の一助となるのではない

かと考えている。参加の多くの子どもたちが、「球技」の種目を共通で理解し、楽しむことにつながるとともに、このプロセスから共通の「大会」が多く生まれることを期待している。

文 献

- 文部科学省（2017）中学校学習指導要領解説 保健体育編，文部科学省，125.
- 和史朗（2011）重度障害者を対象としたアダプテッド・スポーツの試み—肢体不自由特別支援学校における野球指導を通して—，北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報第2号，57-62.
- 渡邊憲幸（2017）余暇を充実させるための北海道ゴロ野球の発展—在校生と卒業生の垣根を越えて—，肢体不自由教育No.228，30-35.

